

「納和歌集等於平等院経蔵記」私注

後藤 昭雄

はじめに

表題の「記」は諸歌集を宇治平等院の経蔵に納めるに際して、その旨を記述したもので、延久三年（一〇七二）九月と
いう日付が明記されている。惟宗孝言の執筆にかかると
『朝野群載』（卷三）に収載されている
『朝続文粹』（卷十一）、『朝野群載』（卷三）に収載されてい
るが、また阪本龍門文庫蔵『平等院御経蔵目録』にも引載され
ている。

本記を文学研究の立場から取り上げたものとして、早く上
野理氏の論がある。^①『拾遺集』から『後拾遺集』まで、なぜ
八十年間もの勅撰集の空白期があるのか。それを考えるのに、
撰関による歌集集成事業をも語る資料として本記を取り上

げている。その後、長い間顧みられることはなかったが、最
近、荒木浩氏が延久初年における源隆国の文学的営為に關連
する文章の一つとして論及した。^②

両氏及び福山氏の論には、本記が原文あるいは訓読文によ
って引用され、上野・福山論文には大意も示されているが、
そこに止まっている。本記は私にとってもかねて気に掛かる
文章であったので、私注を試みることにした。

一

前もって触れておくべきことがある。それは歌集を平等院
経蔵に収めた主体である。誰が納入したのか。平等院の主た
る前関白藤原頼通とする説と、この記の作者の惟宗孝言とす

る説とがあつたが、荒木氏が従来の説の論点を整理して、頼通願主説が妥当であることを説いている⁽⁴⁾。

「記」を読んで行こう。

まず本文をあげる。『平等院御経蔵目録』所収本を底本とする⁽⁵⁾。改行はそのままとし、全文に互つて訓点（読仮名、送仮名、ヲコト点、声点）が付されているが省略する。

納和歌集等於平等院経蔵記

和歌者不闕八万十二之教文無載

姫且孔父之典籍唯為日域之風俗

空抽艷流之綺語然猶男女芳

5 語之間芝蘭結契之処初為

遂配偶之志屢述慰勸之懷後

依交昵愛之交更遣參商之恨

徒飛虚誕花飾之言葉互載

輪廻生死之罪根謂其思風最足

10 発露又壯年之昔朝務之余多闕

数家之篇什自動六義之心情

始従万葉集至于拾遺抄見其

吟詠之人知彼比興之趣雖隔百

年之往賢雖起他界之前輩若

15 感斯一言豈不慙三業加之時斷

外慮側聞内典龜言軟語遂掃

中道之風妄想戲論皆混実相之

月故以斯和歌集等納平等院

経蔵曾非加顕密法文之細帙偏

為慣讚嘆仏教之句偈也願以

20 数篇風雲草木之興恋慕怨

曠之詞翻為安養世界七菩提

之文八正道之詠是以集中所

載貴賤道俗被牽吾願念併生

一仏土誇宿住通依串習力無忘

25 春花翫七宝莊嚴之行樹猶思秋

月讚四智円明之尊容今臨衰老

発此浄心適有知我之者遍結成仏

之縁于時延久三年暮秋九月記

これを『本朝統文粹』（新訂増補国史大系本）及び『朝野群載』所収本文と対校する。『朝野群載』は次の写本を用いた。

東山御文庫本（略称「東本」）

慶長写本（内閣文庫蔵、「慶本」）

菊亭本（京都大学附属図書館蔵、「菊本」）

円満院本（佐藤道生氏蔵、「円本」）

尾州家本（佐藤道生氏蔵、「尾本」）

林崎文庫本（神宮文庫蔵、国史大系本底本、「林本」）

以下の三箇所は改定が必要である。⁶⁾

5行目「語」。底本以外はすべて「談」である。「男女」間の「芳語」あるいは「芳談」となる。語彙としてはいざしれもあり得るかと思われるが、「芳語」は他に用例を見いださない語である。よって「談」に改める。なお、「芳談」も『角川大字源』には「国」と標示する。すなわち和製漢語と認定している。

8行目「載」。『続文粹』及び『朝野群載』の東本・慶本・菊本・尾本は「栽」、これに拠って「栽」に改める。この文字を含む箇所は「互口輪廻生死之罪根」であるが、この句は前句「徒飛虚誕花飾之言葉」と対句をなし、これは「言葉を飛ばす」と、いわゆる縁語による修辞がなされている。したがってその対句も「罪根を栽う」という縁語表現でなければならぬ。「載」は字体の類似による誤写である。

14行目「起」。『続文粹』及び『朝野群載』の東本・慶本・菊本は「赴」、尾本・円本・林本は「趣」であるが、「他界」に続くことから「赴」に改める。「他界に赴く」となる。「趣」も考えられるが、本の素性による。

以上のように校定して、原文を句形を整えて示すと次のようになる。改めた文字に*を付した。

和歌者、

不関八万十二之教文、無載姬巨孔父之典籍。

唯為日域之風俗、空抽艶流之綺語。

然猶、

男女芳談^{*}之間、芝蘭結契之处、

初為遂配偶之志、屢述殷懃之懷、

後依変昵愛之交、更遺參商之恨。

徒飛虚誕花飾之言葉、互栽^{*}輪廻生死之罪根。

謂其思風、最足発露。

又、壮年之昔、朝務之余、

多閱数家之篇什、自動六義之心情。

始自万葉集、至于拾遺抄、

見其吟詠之人、知彼比興之趣。

雖隔百年之往賢、雖赴他界之前輩、

若感斯一言、豈不慙三業。

加之、

時斷外慮、側聞內典、

僂言軟語、遂歸中道之風、

妄想戲論、皆混実相之月。

故、以斯和歌集等、納平等院經藏。

曾非加頭密法文之細帙、偏為慣讀嘆仏乘之句偈也。

願以數篇風雲草木之興、戀慕怨曠之詞、

翻為安養世界七菩提之文八正道之詠。

是以、

集中所載、貴賤道俗、

被牽吾願念、併生一仏土。

誇宿住通、依串習力、

無忘春花、翫七宝莊嚴之行樹、

猶思秋月、讚四智円明之尊容。

今臨衰老、發此淨心。

適有知我之者、遍結成仏之縁。

于時延久三年暮秋九月記。

これに基づいて訓読する。

和歌は八万十二の教文に關はらず、姫且孔父の典籍に載すること無し。唯日域の風俗と為して、空しく艶流の綺語を抽きいづ。然れどもなほ、男女芳談の間、芝蘭結契の処、初めは配偶の志を遂げむがため、屢しば慇懃の懷ひを述べ、後は昵愛の交はりを変ずるに依り、更に參商の恨みを遺す。徒らに虚誕花飾の言葉を飛ばし、互ひに輪廻生死の罪根を救う。其の思風を謂へば、最も発露に足る。

又、壮年の昔、朝務の余り、多く敎家の篇什を閲て、自づから六義の心情を動かす。万葉集自り始めて拾遺抄に至る。

其の吟詠の人を見て、彼の比興の趣きを知る。百年を隔つる往賢と雖も、他界に赴ける前輩と雖も、若し斯の一言に感ぜば、豈三業を恥ぢざらむや。しかのみならず、時に外慮を断ち、側かに内典に聞くに、僂言軟語、遂に中道の風に帰し、妄想戲論、皆実相の月に混ず。

故に、斯の和歌集等を以つて、平等院の經藏に納む。曾つて頭密法文の細帙に加ふるに非ず、偏に讀嘆仏乘の句偈に慣らはむがためなり。願はくは數篇の風雲草木の興、戀慕怨曠の詞を以つて、翻して安養世界の七菩提の文、八正道の詠と

為さむ。

是を以つて、集中所載の貴賤道俗、吾が願念に牽かれて、併せて一仏土に生ぜむ。宿住通を誇り、串習力に依りて、春花を忘るること無く、七宝莊嚴の行樹を翫び、なほ秋月を思ひて、四智円明の尊容を讀へむ。

今、衰老に臨みて、此の淨心を発す。適^たたま我を知る者有らば、遍く成仏の縁を結ばむ。

時に延久三年暮秋九月記す。

必要な語句に注釈を加えていこう。

○八万十二之教文 仏教經典をいう。「八万」は数の多いこと。「十二」は經典を形式、内容により十二に分けた十二部(分)教をいう。『法華經』「見宝塔品」に「若持^二八万四千法藏、十二部經、為人演說、令^三諸聽者、得^二六神通、雖^二能如^レ是、亦未^レ為^レ難」とあるのに基づく。用例として、『法華傳記』卷一の巻頭の偈に「稽首妙法蓮華經、八万十二諸聖教」とあり、本朝では大江朝綱の「朱雀院周忌御願文」(『本朝文粹』卷十四・414⁷)に「彼一句半偈之功能、仏猶難^レ算數、況八万十二之較量、誰敢知^二淺深」とある。

○姫且孔父 周公且と孔子。したがって「姫且孔父之典籍」

は儒教の書物をいう。周公且を「姫且」と称した例として、

大江匡衡の「為^二入道前太政大臣^一辭職並封戸准三宮^二第四表^一」(『本朝文粹』卷四・116)に「昔姫且之輔^二成王^一而臨朝、以^二王少未^レ冠也^一」、大江匡房の「參^二安樂寺^一詩」(『本朝文粹』卷一)に「淳化同^二姫且^一、聖道亞^二仲尼^一」があるが、

後者はこの「記」と同じく周公且と孔子とを対語とする。孔子を「孔父」と称する一例に藤原友実の「野沢佳趣」対策(『本朝文粹』卷三)の「孔父之過^二西狩^一也、獲麟之筆遺^レ文」がある。また、周公且と孔子とを並称して儒教の代表とする例として、「文選序」に「姫公之籍、孔父之書、与^二日月^一俱懸、鬼神爭^レ奧、空海の『三教指帰』卷下に「仮名曰、……、其旨也、則姫孔之所^レ未^レ談、老莊之所^レ未^レ演」がある。

○日域之風俗 「日域」は日本をいう。紀淑望の「古今集真名序」に「自^二大津皇子之初作^三詩賦^一、詞人才子、慕^レ風繼^レ塵、移^レ彼漢家之字、化^二我日域之俗^一」とあり、「日域之風俗」はこの「古今集真名序」に基づく語句であるが、和歌を詠むことを「風俗」の語でいうことは和歌序に多用される。

一例として紀長谷雄の「太上法皇賀^二玄宗法師八十之齡^一和歌序」(『本朝文粹』卷十一・348)の「写^二一心之思^一、載^二八

首之歌。仮物以祝之、取、喻以賀之。此間風俗、勿相輕一矣」は「古今集真名序」に先立つ早い例である。「此間」は「ここ」で、外国に対して日本をいう。

○艶流 やはり「古今集真名序」の語で、「浮詞雲興、艶流泉誦、其美皆落、其花独榮」とあるのをを用いる。

○綺語 美しく飾り立てた言葉。仏教の立場から文学をいう。白居易の「香山寺白氏洛中集記」（『白氏文集』卷七十二）に「狂言綺語」として用いられている。本朝の一例として紀齊名の「勸学会聴」講「法華経 同賦」撰「念山林」詩序（『本朝文粹』卷十・278）に「先講経而后言詩、内信心而外綺語」とある。

○芳談 うるわしい語らい。清原佐忠の「暮春見藤亜相山莊尚齒会詩」（『粟田左府尚齒会詩』）に「芳談説尽花前暮、宴席開來醉裏春」、また藤原為時の「観謁之後、以詩贈宋客光世昌」（『本朝麗藻』卷下）に「芳談日暮多残緒、羨以詩篇子細通」とある。

○芝蘭 もとは靈草と香草をいうが、ここでは才徳に秀れた人。菅原道真の「請罷藏人頭状」（『本朝文粹』卷五・142）の「其徳也、堪守芝蘭之種、其威也、足率鸞鳳之群」、藤原有国の「初冬感李部橘侍郎見過懷旧命飲」

（『本朝麗藻』卷下）の「偶遇芝蘭芳契友、宣風坊裏一傾盃」はその例であるが、後者は「契」の語も併せて用いており、この用法に近い。この詩の用例のように、「芝蘭の契」は男性間の交友についていうのが本来であるが（早く『懷風藻』の藤原宇合の「在常陸贈倭判官留在京」の「琴瑟之交遠相阻、芝蘭之契接無由」もその例）、後文の展開を見ると、ここでは、前句と同じく男女間の契りとして用いている。

○昵愛 親しみ愛する。『文選』の用語。謝惠連「七月七日夜詠七夕」（卷三十）に「遐川阻昵愛、脩渚曠清容」とある。

○参商之恨 会うことのできない恨み。「参」はオリオン座、「商」はサソリ座で、同時に空に出ることはない。杜甫の「贈衛八处士」の「人生不相見、動如参与商」はわかり易い用例であるが、この文脈により近いのは白居易の新楽府「太行路」の「与君結髮未五載、忽從牛女為参商」である。

○飛一言葉 詩歌を詠む。菅原定義の「夏日陪北野聖廟聽法華経」（『東大寺藏願文集』所収詩卷）に「去年冬景飛言葉、今歲夏天聽法華」とある。文道の神、菅原道真

を祭る北野神社で詩宴が開かれたことをいう。また藤原有業の「秋催 詩客興」（『擲金抄』巻中）に「詞華更発露清色、言葉初飛風冷程」の例がある。

○輪廻生死 迷いの世界で生と死をくり返すこと。都良香の、菅野惟肖の「分_レ別生死」の題による対策に対する評定文（『都氏文集』巻五）に「周礼之教、唯_レ发_レ化者去衡尺之談、不_レ論_レ死生輪廻之理」の例がある。

○思風 心の中の思い、感情、また思想。陸機の「文賦」（『文選』巻十七）に「思風_レ发_レ於胸臆、言泉流_レ於臂思」とある。本朝では藤原有国の「讚_レ法華經二十八品_レ和歌序」（『本朝文粹』巻十一・349）の「思風猶疎、讚_レ二十八品於釈迦文之教」は一例。

○発露 つつみ隠さず明らかにする。延いて告白、懺悔の意となる。『往生要集』巻中、大文第五に「如_レ宝積經九十一云、……、所行罪業、慙愧_レ発露。若不_レ爾者、欺_レ誑如来」、大江匡房の「不知願主願文」（『江都督納言願文集』巻五）に「朝修_レ法華懺法、発_レ露六根之罪障、暮行_レ弥陀念仏、願_レ求九品之妙果」の例がある。

○六義 「古今集真名序」の「和歌有_レ六義。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」に基づいて、和歌を

いう。源俊房の「暮春侍_レ中殿詠_レ竹不_レ改_レ色和歌序」（『本朝統文粹』巻十）に「吾君、……、詞兼_レ六義、自叶_レ赤人丸之流」というのは、堀河天皇が和歌を詠むことをいう。この語は和歌序に多用されるが、藤原有業の「於_レ雲居寺_レ同詠_レ雨中逢_レ友和歌序」（『本朝小序集』）に「願_レ以_レ此六義之興、翻_レ為_レ彼九品之縁」というのは、この「記」の後文の記述と発想も類似する。

○比興 先の「六義」のうちの二つ。本来は『詩経』の用語で直喩と隱喩をいうが、ここでは、「六義」と同じく、和歌をいう。『続日本後紀』嘉祥二年三月二十六日条に「夫倭歌之体、比興_レ為_レ先、感_レ動人情、最在_レ茲矣」とある。

○斯一言 前段落の「謂_レ其思風、最足_レ発露」を指す。

○三業 意、口、身の働。意志と言葉と行動。『往生要集』巻上、大文第四の「礼拝門、是即三業相應之身業也」は、礼拝という動作は三業のうちの身業に当たるといっているのである。また大江匡房の「頭季卿室家千日講結願供養願文」（『江都督納言願文集』巻五）に「五障之雲雖_レ重、望_レ証入於無垢界之正覺、三業之塵雖_レ深、期_レ扨拭於有頂天之成道」とある。

○龜言軟語 遂帰中道之風 「龜言軟語」は粗雑な言葉と穏やかな物言い。これで一つの成句。『大般涅槃經』巻二十に

「諸仏常軟語、為衆故説_レ。鹿。鹿言及軟語、皆帰_二第一義_一」、「妙法蓮華經文句」に「鹿言軟語、皆帰_二第一義_一」とある。

これらの「第一義」は最高の道理の意。「内典に聞くに」としていう、この「鹿言軟語、遂に中道の風に帰し」はこれらの文句を踏まえている。「中道」はいずれにも片寄ることのない真実の道理。「第一義」をこの語に置き換えた。藤原基俊の「雲居寺聖人懺_二狂言綺語_一和歌序」（『本朝小序集』）に「經_二演鹿言及輕語_一、皆帰_二第一義_一之文。誠哉此言」というのも先の經典の文句に基づいている。なお、この「輕語」は字形の近似による誤りである。

○妄想戲論皆混実相之月 「妄想戲論」は迷いの心と無益な談論。これも仏典に散見する成語であるが、一例として『大方広仏華嚴經』卷五十二に「使_二其_レ阿闍而撮_二取_レ之_一、置_二仏法_一中、令_レ断_二一切_レ妄想戲論_一、安_二住_レ如来無分別無礙行_一」がある。「実相」は真実のすがた。具平親王「普賢菩薩讚序」（『本朝文粹』卷十二・357）に「誦_二法華者_一、住_二心於六牙象_一、読_二華嚴者_一、繫_二念於十願王_一。或占_二閑林窮谷_一、觀_二実相_一而見_二真容_一者聞聞」とある。この「妄想戲論も皆実相の月に混ず」も前句「鹿言軟語遂に中道の風に帰し」と対をなして、「側かに内典に聞くに」から続くものであることから、

類似した措辞が仏典になければならぬが、見いだしえない。⁽⁹⁾

○細帙 浅葱色の布のちつ。「文選序」に「飛文染翰、則卷_二細帙_一」とある。

○讚嘆仏乘 「仏乘」はすべての人を悟りに導く教え。それをほめ讃える。次項に引く白居易の「香山寺白氏洛中集記」にいう「讚仏乘」である。

○願以——、翻為——。この構文は白居易「香山寺白氏洛中集記」の「願以_二今生世俗文字之業_一・狂言綺語之過_一、転為_二将来世世讚仏乘之因_一・転法輪之縁_一」に拠る。この聯は『和漢朗詠集』卷下・仏事に入るが(588)、ここでは後句の「転為」を「翻為」に作り、この「記」と一致する。

○風雲草木之興 自然の風物を詠んだ歌をいう。「文選序」に「若其紀_二一事_一・詠_二一物_一、風雲草木之興、魚虫禽獸之流、推而広_レ之、不_レ可_二勝載_一矣」とある措辞をそのまま用いる。用例として、この「記」より後のものであるが、花園赤恒（戯名）の「詳_二和歌_一」対策（『本朝小序集』）に「風雲草木之非_一」、課_二六義_一而編次、哀樂怨別之区分、勞_二寸心_一而裁成」がある。

○恋慕怨曠之詞 恋の歌である。「怨曠」は男女間で相手を

得られず、あるいは相手を失つて悲しみ怨むこと。菅原文時「釈奠毛詩講後、賦詩者志之所之」詩序（『本朝文粹』卷九・267）に「王沢之及四海也、性水澄兮幽咽絶、德輝之滯一隅也、情竇暗兮怨曠生」とある。

○七菩提、八正道 「七菩提」は悟りに到るための七種の修行法、「八正道」は修行の基本となる八種の実践法。対語として仏典に用いられ、『大方等大集経』卷四の偈に「七菩提分名為根、八正道分名為業」、また『阿弥陀経通賛疏』卷中に「経云、其音演暢五根五力七菩提八正道分」の例がある。なお、仮名文であるが、『栄花物語』「玉の台」に「池の浪も、五根、五力、七菩提分、八正道を述べ説くと聞こゆ。山彦も同じ声に答ふれば、草木すらみな法を説くと聞こゆ」とある。「五根」以下は「阿弥陀経通賛疏」の表現を承ける。

○宿住通 前世のを知る知恵。仏典に多用の語。本朝の例に慶滋保胤「勸学会、於禪林寺聽講法華経同賦聚沙為二仏塔」詩序（『本朝文粹』卷十・277）の「我等、或齡過二壯年、其誠且多レ日。何疑来世開宿住通覺今日事、如内智者大師記靈山会」がある。

○串習力 「串」はならう、なれる意。「串習力」も仏典に常用の語で、一例に『阿毘達磨毘婆沙論』卷十一の「彼二

人、由二串習力得如レ是同分智」がある。

○七宝莊嚴之行樹 「行樹」は立ち並んだ木々。『法華経』「比喻品」に「国名離垢。……、瑠璃為地、有二八交道。黄金為繩、以界其傍。其傍各有七宝行樹」、『経律異相』卷二十四、無諍念金輪王請仏僧八に「其楼四門、七宝所成。七宝行樹、其樹皆懸宝衣瓔珞」とある。

○秋月 仏の円満の姿は秋月にたとえられる。『往生要集』卷上、大文第二に「座上有仏、相好無辺。烏瑟高頭、晴天翠濃、白毫右旋、秋月光満」とある。菅原輔正の「円融院四十九日御願文」（『本朝文粹』卷十四・415）に「八万四千之相、秋月満而高懸」というのも同じである。

○四智円明 「四智」は悟りを得た時に備わる四種の智恵。「四智円明」は完全な悟りに達した状態。『大乘本生心地観経』卷三の偈に「自受用身诸相好、一一遍満十方利、四智円明受法楽、前仏後仏体皆用」の例がある。

口語訳すれば次のようになろう。

和歌は仏教の經典に関わりはなく、儒教の典籍に記載されることもない。まったく日本の風俗であり、空しく美しい調べの飾られた言葉をつむぎ出している。しかし、男女の楽し

い語らいの時、また才徳にすぐれた人が契りを結ぶ場で、初めは夫婦になろうという思いを遂げようと、しばしば思慕の情を述べるものの、後には親密な交わりも変わってしまうことで、さらには会えない恨みを残すことになるのである。いたずらに飾り立てた偽りの言葉を交わして、お互いに生死の世界を経廻る罪の原因を作ることになる。(和歌を詠む人の感情がこのようなものであると考えると、最も懺悔に値するものであろう。

また壮年の昔、朝廷での務めの合い間に、諸家の歌を多く読んで、自ずから歌心を動かされたものだ。『万葉集』から『拾遺抄』まで、その歌人を見、その歌の趣きを知った。百年を隔てた古の賢人、亡くなった先人といえども、先の一言(「最も懺悔に値する」)に感じるところがあれば、(人の為す)心・口・体の働きを恥じることがあるだろう。さらには、他への慮りを断ち、仏典に尋ねてみると、粗雑な言葉も穏やかな物言いも結局は真理に帰一し、偽りの想念、戯れの談論もすべて真実のすがたに関わるという。

そこで、これらの和歌集を平等院の経蔵に納めることとした。これはけっして顕密の經典に加えようとするものではなく、ひとえに人々を悟りに導く仏の教えを讃える詩句のごと

きものとしようとするためである。どうか諸歌の自然風物の興趣、恋や恨みの言葉を、転じて極楽世界の悟りに到るための七つの修行法を述べた文、八つの修行実践法の詠歌としたと思う。

これによって、歌集所載の貴賤僧俗の人々が、私の願いに引かれて、すべて極楽浄土に生まれ変わりますように。(ここでは)前世のことを知る知恵、また慣れ身に付けた力によって、(歌に詠んだ)春の花を忘れることなく、七宝で飾られた木々を賞で楽しみ、同じように秋の月を思つて、完全な悟りに達した仏のお姿を讃えることであらう。

私は今老いにさしかかつて、この清浄心を起こした。もしたまたま私の思いを知る人があれば、そうした人すべてと成仏の縁を結びたいと思う。

二

この「記」が深い関わりを持つのは、語釈でも断片的に触れてきた白居易の「香山寺白氏洛中集記」である。このことも上野論文に指摘があるが、そもそも平等院に歌集を奉納するという行為自体、そしてそのことを「記」に記述するとい

うことがすでに白居易が自らの詩集を香山寺に収め、「記」を書いたことに倣うものであった。

表現のうえでの借用についても、前記以外の例も指摘されているが、なおある。それも含めて、影響の深切なことを見るために「白氏洛中集記」の全部を引いてみよう。

白氏洛中集者、樂天在洛所著書也。大和三年春、樂天始以太子賓客分司東都、及茲十有二年矣。其間賦格律詩凡八百首、合為二十卷。今納于龍門香山寺經藏堂。夫以狂簡斐然之文、而歸依支提法宝藏者、於意云何。我有本願、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、転為將來世世讚仏乘之因、転法輪之縁

也。十方三世諸仏_レ知。噫、經堂未_レ滅、記石未_レ泯之間、乘此願力、安知_レ我他生不_レ復游_二是寺_一、復觀_レ斯文_中、得_レ宿命通_、省_二今日事_一、如_レ智大師記_二靈山於前會_一、羊叔子識_中金鑲於後身_一者歟。於戲、垂老之年、絶筆於此、有_レ知_レ我者_、亦無_レ隱焉。大唐開成五年十一月二日、中大夫守太子少傅馮翊開國侯上柱國賜紫金魚袋白居易樂天記。

傍線を付した部分が「納和歌集記」に撰取されている措辞である。前節の語釈には挙げなかったが、「垂老」「我を知る

者有らば」もそうである。さらに「宿命通」もそうである。「納和歌集記」の「宿住通」と同義で、孝言はこれを一字を換えて用いたのである。

この「白氏洛中集記」の受容ということと密接に関わるが、「納和歌集記」の文学史における意義の一つは、上野論文が述べるように、和歌を明確に狂言綺語と捉えて記述した最も早いものということである。

語釈で触れた藤原基俊の「雲居寺聖人の狂言綺語を懺する和歌序」(『本朝小序集』)は表題のとおり、より端的に詠歌を狂言綺語とみなして、その滅罪を行うことを述べた作品である。

和歌之興、其風遠哉。陰陽定_レ義、山川分_レ形以降、神明所感、歌詠有_レ由。所以、住吉明神、為_二諷諭_一垂_レ跡、後代詞人、慣_レ微言_一繼_レ塵。倩尋_二此明神之本地_一、寧非_二高貴德王菩薩_一哉、追訪_二此菩薩之対揚_一、則是双林拈捨之説教也。經_二演鹿言及輕語_一、皆歸_二第一義之文_一。誠哉此言。予、止觀之餘、坐禪之隙、時々有_二和歌之口号_一。春朝戲指_レ花称_レ雲、秋夕呀假_レ月云_レ雪。妄言之咎難_レ避、綺語之過何為。仍_レ凶_レ彼菩薩之像、写_二此經典之文_一。向_レ像講_レ經、礼_レ經謝_レ罪。請_二以一生中之狂言_一、翻_二為三菩薩

提之因縁^二而已。

ために傍線部のような、「納和歌集記」とほとんど同じ表現もあるのであり、この和歌序もまた狂言綺語観の展開を見るうえで注目すべき作品であるが、これは嘉承元年（一一〇六）九月十三日の作で、「納和歌集記」に三十年ほど遅れる。『本朝小序集』にもう一例ある。これもたまたまか雲居寺に関わるが、藤原有業の「夏日雲居寺に於いて同に「雨中友に逢ふ」を詠ずる和歌序」である。

交芳^二於蘭、契堅^二於石^一之者、七八許輩。凌^二雨脚之滂流、尋^二雲居之幽寺。蓋訪^二上人寂寞^一也。所^レ談者空仮中之妙理矣、□□自消、所^レ礼者安養界之嚴飾焉、眼塵忽洗。凡視聽之所^レ触、莫^レ不^レ滅^二罪霜^一矣。隨喜之餘、聊入^二風情。題目々、雨中逢^レ友、即是斯時也。願以^二此六義之興、翻為^二彼九品之縁。其詞曰。

末尾の一文である。「六義」はいうまでもなく「納和歌集記」と同じく和歌の代名詞である。この序では、この一文はすでに和歌を詠むことの免罪符として末尾に添えられているというようにも思えるが、もしそうであるとすれば、狂言綺語観のいつその浸透をもの語るものである。この序は制作年時が明確でなく、文中の「上人」が瞻西と

考えられるので、その没年、大治二年（一一二七）以前の作としか分らない。

「納和歌集記」はこれらと和歌序に述べられる思考、叙述を導くものとなったのである。

この「記」には狂言綺語観の展開を見ていくうえで注目すべきものがさらにいくつか含まれている。

「狂言綺語」と並んで狂言綺語観を示す成句としてよく用いられるものに「麈言軟語帰^二第一義^一」がある。狂言綺語を論じるに際しては常にといいてもいいほど言及されることであり、今はそれらの論で取り上げられる作品名を列挙するに止めるが、「和歌政所一品経供養表白」、「梁塵秘抄」（二二二）、『今鏡』「打聞」作り物語の行方、さらに中世の説話集に顕著で、『十訓集』序、『古今著聞集』跋、『沙石集』序等に用いられているが、これらに先立って、この「記」の「麈言軟語遂帰^二中道之風^一」がある。

上記の諸作のなかでも「和歌政所一品経供養表白」はこれまでの狂言綺語論において重要視された作品であるが、この「表白」は「納和歌集記」の影響下にある。

まずは見易い表現上のことであるが、「表白」の

願風雲草樹之興、更帰^二三草二木之泥^一、

恋慕怨別之詞、悉混^二開示悟入之理^一。

という対句の傍線部は、「記」の

願以^二數篇風雲草木之興、恋慕怨曠之詞^一、

翻為^二安養世界七菩提之文、八正道之詠^一

の傍線部に基づく。

また、「表白」の

何況、婦人佳美之詠、驚識恨於秋思、男女恋慕之詞、

動^二情塵於春夢、互萌^二輪廻之罪根、各結^二流転之業因^一。

の個所は、和歌のなかでもとり分けて恋の歌は罪深いものだというのであるが、これは「記」の初段落が専ら恋の歌に焦点を合わせてその罪因たることをいうのを約めたものである。

措辞のうえでも、「互萌^二輪廻之罪根^一」は「記」の「互栽^二輪廻生死之罪根^一」に拠る。

もう一つの両者の相似は単なる表現上のことに止まらない。

「表白」の終わりに近く和歌史に名を連ねる歌人たちの救済を願う記述がある。人麻呂から喜撰までの六人の名を列挙してそれぞれにそのことを希求した後、さらに一般化して次のようにくり返される。

凡列^二名於五代撰集之輩、付^二思於六義之風情之倫、併出^二三有之樊籠、皆生^二一仏之浄土^一。

このように、先人の救済を願うことがこの「表白」の主題であり、それを強調する点にこの作品の特色が見られると評されているが、同様の叙述は「納和歌集記」にもすでにあり⁽¹⁶⁾である。「集中所載貴踐道俗、被^レ牽^二吾願念、併生^二一仏土^一」がそうである。「皆生^二一仏之浄土^一」と「併生^二一仏土^一」とは措辞もほぼ同一である。

表白は仏教漢文の一種として、対象の追善、救済を目的として書かれる文章であるが、記はそれを目的とする文章ではそもそもない。したがって「表白」に比べれば簡略な叙述である。簡略ではあるものの、「納和歌集記」にこの叙述がある。この点においても、「記」は「表白」の先蹤と見ることができよう。

以上のように見てくると、この「納和歌集等於平等院経蔵記」は、平安後期から中世に及ぶ狂言綺語観の展開を考えるに当たって、もっと注目されている作品であると思う。

注

- (1) 建築史学からの論として福山敏男「平等院の経蔵と納和歌集記」(『日本建築史研究統編』墨本書房、一九六八年)がある。
- (2) 上野理「納和歌集等於平等院経蔵記」(『後拾遺集前後』笠間書院、一九七六年)

- (3) 荒木浩「源隆国における安養集と宇治大納言物語の位相―南泉房と延久三年をめぐって―」(『説話集の構想と意匠』勉誠出版、二〇一二年)
- (4) 注3に同じ。なお、従来の諸家の説とは全く異なる視点であるが、テキストの記載の様態も論拠になるのではなからうか。『本朝統文粹』は本文の後に改行して「作者大学頭孝言」、「平等院御経藏目錄」は同じく「作者大学頭惟宗孝言」、「朝野群載」は表題の下に「作者宗孝言」と書く。これらは、文字どおり孝言は記の作者である、それ以上ではないことを示しているのではなからうか。
- (5) 「阪本龍門文庫複製叢刊」(一九五九年)による。「解説」(川瀬一馬)によれば、平安末期の書写。
- (6) これ以外に異同は少なくないが、繁雑を厭って省略する。
- (7) 新日本古典文学大系本の作品番号。
- (8) 拙稿「永承五年北野聖廟法華講詩」(『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館、一九九三年)参照。
- (9) 唐の一行の『大毘盧遮那成仏経疏』(『大正新脩大藏経』第三十九卷所収)に「爾時、一切意識妄想戲論、皆悉清浄、法界円照如『秋月在空』とあるのは近いかと思われるが、「経」ではなく「疏」に見えるものであるゆえ、注記に止めておく。
- (10) 上野論文に指摘する。
- (11) この和歌序では詠歌における比喩を「妄言の答」、「綺語の過」と捉えている。
- (12) 本文の後に注記がある。
- (13) 本間洋一「『本朝小序集』研究覚書」(『同志社女子大学日本語日本文学』第一〇号、一九九八年)。
- (14) これ以降の例は荒木浩『沙石集』と「和歌陀羅尼」説について(同編、科学研究費補助金研究成果報告書、「仏教修法

と文学的表現に関する文献学的考察―夢記・伝承・文学の発生―」(二〇〇五年)に指摘がある。

(15) 渡部泰明「『古来風林抄』と狂言綺語観」(『中世和歌の生成』若草書房、一九九九年。初出一九九〇年)、三角洋一「いわゆる狂言綺語観について」(『源氏物語と天台浄土教』若草書房、一九九六年。初出一九九二年)

(16) 注15の渡部論文。

() とう・あきお 成城大学教授